

AND 賞
Archi-Neering Design AWARD
第2回 アーキニアリング・デザイン・アワード 2021



第2回 AND 賞をめぐって

AND 賞実行委員長 斎藤 公男



斎藤 公男
SAITO Masao
A-Forum 代表
日本大学名譽教授

1938 年群馬県生まれ /1961 年日本大学理工学部建築学科卒業 /1963 年同大学院修士課程修了 /1973 年同大学理工学部助教授 /1991 年同大学理工学部教授 /2007 ~ 2008 年日本建築学会 第 50 代 会長 /2008 年日本大学名譽教授
主な受賞：1987 年日本建築学会賞（業績）、1993 年松井賞、1997 年 IASS(國際シェル・空間構造学会) 坪井賞、2002 年 Pioneer Award 、1978 年・1991 年・2003 年・2021 年 BCS 賞、2007 年日本建築学会教育賞、2009 年 IASS Torroja Medal 、2018 年日本建築学会大賞
主な著作：「新しい建築のみかた」(エクスナレッジ) 、「空間構造物語」(彰国社)

当初、企画・予定されていた「AND 賞設立記念フォーラム」は 2020 年 4 月であった。しかし急速に拡大した COVID-19 の波を前に、開催の延期を余儀なくされた。同年の 10 月 10 日 一かつての東京五輪開催（1964）と同じ日一にオンライン配信という形ではあったが、選考委員 3 名、堀越・陶器・磯氏による AND 賞に対する強いメッセージが発せられ、AND 賞のスタートがきれた。

第 1 回の応募作品数は 55 点。いずれもすぐれて魅力的な作品ぞろいであり、最終選考会で行われたプレゼンと意見交換、公開された選考プロセスは大きな関心と賛同を集めることができた。厳しい状況が展開しつつあるコロナ禍において、まさに「未来に向けて、口ケットが打ち上げられた」感があった。

それから 1 年経った 2021 年秋、コロナ禍は一向に収まる気配がなかった。2 年目は大切だが、果たしてどうなるのだろうか。そんな心配にもかかわらず、40 点の応募をいただいた。この事態の中で、まずは応募された皆様に心より感謝申し上げる次第です。

第 2 回となる AND 賞の選考委員は 4 名の方々にお願いした。堀越英嗣（建築家）、陶器浩一（構造家）、磯達雄（建築ジャーナリスト）の諸氏は昨年と同じであるが、あらたに福島加津也氏（建築家）を選考委員長にお迎えすることができた。

今回も一次選考から議論は沸騰したようである。最終選考に進んだ 10 作品を見ても、その個性的な魅力と挑戦の姿には驚くばかりであった。作品は多様性に富み、いずれも優劣つけ難い強いメッセージを放っている。「選考」することの難しさと苦しさを共有するような緊張の時間を建築会館大ホールにおいて体感することができた。
最終選考会は昨年と同じく YouTube をつかってライブ配信され、アーカイブが現在も視聴可能である。選考会の数日後には再生数は 1000 回を超えた。学生を含め若い人達も多いようである。

4 人の選考委員から発せられた AND 賞に対する視点や評価軸も興味深い。様々な「建築賞」と比べた時、「AND 賞」とは何か。その方向性が次第に見えてきたような実感と期待とが交錯している。

一般的にみて「建築賞」の選考（審査）に大切なものは 4 つと考える。

- 1) 賞に対する評価軸が理解されること。
- 2) 出来得れば現地視察が可能であること。
- 3) 選考プロセスをできるだけ公にすること。
- 4) 受賞あるいは入賞作品に対する講評が記録・公開されること。

AND 賞では残念ながら 2) の現地審査は行われないものの、他の要件をできるだけ満たすことが目標となっている。作品の完成度や個人業績だけでなく、プロジェクトにこめられたさまざまな協働や、設計から施工に至る発想・工夫、美しさと合理性の融合、個的だけではない普遍的な創造性。漠とはしているがそうした力点と物語が形となつて現われはじめている。第 2 回の AND 賞選考からみえた第一の所感である。

あらためて「建築」を愛し、「デザインと技術の融合」に心寄せる皆様のご支援に心より感謝し、AND 賞の今後の発展を楽しみにしたい。

第2回 AND 賞 スケジュール

2021/09/10 応募要項公開
 2021/10/10 募集開始
 2021/12/10 応募締め切り
 2021/12/18 一次選考会
 2021/12/24 一次選考通過者発表
 2022/02/05 最終選考会
 2022/02/26 表彰式及び受賞講演会



第2回AND賞最終選考会・タイムライン	
司会：小澤雄樹	
14:00 開会	
14:00 挨拶（斎藤実行委員長）	
14:03 挨拶（福島選考委員長）	
14:10 プrezent (4分) +質疑応答 (6分)	×5組
15:00 休憩	
15:20 プrezent (4分) +質疑応答 (6分)	×5組
15:20 休憩	
16:30 最終選考 (10作品→4作品)	
16:50 休憩	
17:00 最終選考 (最優秀選考)	
17:25 結果発表 (福島選考委員長)	
17:30 挨拶（斎藤実行委員長）	
17:35 閉会	



選考経過と総評

AND 賞選考委員長 福島 加津也



福島 加津也
FUKUSHIMA Katsuya
建築家
福島加津也
+富永祥子建築設計事務所
東京都市大学工学部建築学科
教授

1968 年 神奈川県生まれ /1990 年 武蔵工業大学工学部建築学科卒業 /1993 年 東京藝術大学大学院美術研究科修了 /1994 年～ 2002 年 伊東豊雄建築設計事務所 /2003 年～現在 福島加津也 + 富永祥子建築設計事務所 / 現在 東京都市大学工学部建築学科教授
主な受賞 : 2005 年 JIA 新人賞 /2019 年 住宅建築賞金賞 /2015 年 日本建築学会賞 (作品) /2018 年 ユネスコアジア太平洋文化遺産保全賞 /2020 年 DAM ARCHITECTURAL BOOK AWARD (ドイツ建築博物館)
主な作品 : 2004 年 中国木材名古屋事業所 /2008 年 柱と床 /2013 年 木の構築 - 工学院大学弓道場 + ボクシング場 /2017 年 時間の倉庫 - 旧本庄商業銀行煉瓦倉庫 /2021 年 高床の家

昨年度の第 1 回に続いて、今年度に第 2 回の AND 賞が開催されたことを大変うれしく思います。

現代の日本では、成長社会から成熟社会へと大きく変化しつつあることを実感します。前世紀の経済発展と進歩礼賛という単純化された目標から、持続可能性と発展可能性という複雑な状況の中で、工学と美学の融合を目指すアーキニアリングというテーマは、さらなる多様性を求めて、環境や建設、改修やものづくりにまで拡がります。

このため、AND 賞の選考委員も多様にならざるを得ません。経験豊富な建築家として堀越委員、構造設計にとどまらず大学での教育や震災復興など幅広い活動をしている構造家の陶器委員に、日本では貴重な存在である建築批評家として磯委員に、若輩の建築家として福島、という 4 名で構成されました。

一次選考では、すでに多くの受賞を得ている著名な作品から、大学の研究室の活動や家具のデザインまで、幅広い分野から 40 作品ものすばらしい応募を得ました。その中から、AND 賞の意義にふさわしい 10 作品が入賞として選ばれて、最終選考に進みました。また、惜しくも僅差で入賞には届かなかった作品を、今年度から入選として表彰することになりました。ここには 4 作品が入りました

最終選考は、昨年と同様にコロナ禍中の開催となりました。選考委員と登壇者のディスカッションが何よりと考え、十分な感染対策を施した上で、登壇者が建築会館大ホールでの対面と ZOOM によるオンラインを選択できるハイブリッド方式を整えて、さらに YouTube でのリアルタイムの配信を行うことで、幅広い方々に聴講をしていただきました。これらは、実行委員会をはじめとする関係者のみなさんの大きな尽力によるものです。

当日のプレゼンテーションは一作品の発表が 4 分、質疑応答が 6 分の計 10 分です。登壇者のみなさんについていねいな説明をしていただいたおかげで、資料ではわかりにくく内容までしっかり確認できたように思います。

10 作品のプレゼンテーションが終了後、4 人の選考委員が一人 4 票で投票を行いました。ここでは意外にも各選考委員の票がまとまり、3 票以上だった 4 作品が最優秀賞の選考に残りました。

残った 4 作品には、これまでの選考委員との質疑応答を踏まえて、1 分の追加アピールの時間を取りました。選考委員と登壇者の議論を双方向に活性化したい、という思いから、今年度から始まった仕組みです。こうして、みなさんからのさらに熱いアピールを得ることができました。時間管理などの課題はありますが、来年度以降もぜひ継続していきたいと思っています。

その後の選考委員の一人一票の投票では、堀越委員と磯委員が「まれびとの家」、陶器委員が「KAIT 広場」、福島が「閑上の掘立柱」を選びました。そう、ここで票が大きくわかれることになったのです。多様性という AND 賞の性格のため、最優秀を決めることが難しいことは予想されていました。そのため、各選考委員がそれぞれの AND 賞の選考基準を改めて明らかにして、堀越委員の「チャレンジ、楽しさ、美しさ」、磯委員の「素朴、本質、技術」、陶器委員の「さりげなさ、正直さ、感動」、福島の「協働の拡がり、表現の強さ」などが挙げられ、これを元にさらなる議論を重ねた結果、全選考委員一致で「まれびとの家」を最優秀賞、他の 3 作品を優秀賞とすることになりました。

選考を終えた今、改めて振り返ってみると、この選考で議論されていたのは、建築の個別性と普遍性を両立することであったように思います。近代のモダニズムが普遍性を志向し、その後のポストモダニズム以降は個別性を志向しました。そして、この普遍性と個別性の両立が現代の建築にとって重要な課題となるのでしょうか。AND 賞での議論が、その一助となることを期待しています。

選考を終えて

AND 賞選考委員 機 達雄



機 達雄
ISO Tatsuo

1963 年埼玉県生まれ 1988 年名古屋大学工学部建築学科卒業後、日経 BP 社で雑誌「日経アーキテクチュア」の編集に携わる。2000 年独立、2002 年フリックスタジオ共同主宰、2020 年 Office Bunga 共同主宰。2001 年から桑沢デザイン研究所非常勤講師、2008 年から武蔵野美術大学非常勤講師を兼務。主な著作に『昭和モダン建築巡礼 西日本編／東日本編』(宮沢洋との共著、日経 BP 社刊)、『ポストモダン建築巡礼』(同)、『菊竹清訓巡礼』(同)、『ぼくらが夢見た未来都市』(五十嵐太郎との共著、PHP 研究所刊)など

第 2 回目の AND 賞には 40 件の応募があり、それぞれに充実した内容をもっていた。茶室のインスタレーションから超高層ビルまで、規模も用途もまったく異なる作品を評価するのはたいへんな苦労であったが、応募作の多様性は AND 賞ならでは面白さもあり、選考の醍醐味でもあった。

選考の基準として意識したのは、“AND”という言葉に込められた意味である。“AND”とは、Archi-Neering Design の略だが、Architecture and Engineering の “AND”でもある。“AND”は建築と技術の間に挟まって、両者をつないでいる。それだけでなく、離れているようにみえるもうもうの事柄を、“AND”は結びつけてくれるのである。そういう意味で、最終選考会において最優秀賞に選んだ「まれびとの家 伝統 X デジタルファブリケーションに構造的な価値付けをする」は、建築と技術ばかりでなく、都市と山村、伝統と未来、ハイテックとローテック、プロフェッショナルとアマチュアなど、いろいろなもの同士を結びつけており、“AND”であることを最もよく体現したプロジェクトであった。また、AND 賞はつくるプロセスを評価するという面もあり、デジタル技術を駆使したこれまでにない木造建築のつくり方を提示したこの作品は、その意味でも傑出していた。

選考で最優秀賞として推すかどうか、最後まで悩んだのが「懸垂鋼板が空に漂う KAIT 広場」であった。湾曲した無柱の広い空間は類例がなく、ビルディングタイプとしても独自である。実現にあたっては、多くの困難があったと思うが、応募者を中心とするチームは見事にこれをクリアした。その点は最大限の敬意を表したい。しかし未体験の空間であるだけに、苦労して達成したこの建築の意義を確信するまでには至らなかった。もし実際に訪れていたら、躊躇なく票を入れられたのかもしれない。しかし書類と対面プレゼンテーションによる選考を行うこの賞では、仕方のないことである。

「閑上の掘立柱—震災後に嵩上げされた堤防と共に存するオフィスー」も最優秀賞の候補としてぎりぎりまで考えていた。東日本大震災で大きな津波による被害を受けた場所で、海と建築がどのように向き合えるかについて、技術によってひとつの解決を導いている。最終選考会の追加プレゼンテーションでは家具の説明が行われ、構造からインテリアまで一貫してデザインの追求が果たされていることが明らかになった。選考が進むにつれて、評価が高まった作品だった。

「甲陽園の家 (LVL を用いた組木アーチフレーム)」は、小規模な住宅にしては主張が強い表現となっていたが、その理由が工法から合理的に説明され、AND 賞にふさわしい住宅作品であると腑に落ちた。

以上の最優秀賞、優秀賞以外の入賞作の中にも、「GALLERY U/a」、「D タワー西新宿」、「CLT 二方向フラットスラブ—木の美しさを活かした環境型ターミナルの設計を通してー」、「HIROPPA ありきたりな材料とローテクでつくられた上品な建築」、「RYUBOKU HUT 一流木を構造体とした縄文建築ー」など、魅力的なプロジェクトが多数あった。

また、入賞からはもれたが、「Digital Garage "Pangaea" | Super Furniture」、「FUJIHIMURO "氷穴"」も興味深い作品であった。

AND 賞選考委員 陶器 浩一



(撮影：堀田貞雄)

陶器 浩一
TOKI Hirokazu

1962年生まれ。1986年京都大学大学院修了。1986～2003年日建設計。2003年滋賀県立大学助教授 2006年教授、現在に至る。

主な作品：キーエンス本社研究所ビル、愛媛県歴史文化博物館、愛媛県美術館、梅田ダイビル、兵庫県芸術文化センター、積層の家、清里アートギャラリー、澄心寺庫裏、海光の家、半居、福良港津波防災ステーション、竹の会所、さとうみステーション、クアパーク長湯など。

受賞：JSCE賞、Outstanding Structure Award (IABSE)、松井源吾賞、日本建築学会賞(技術)、日本建築大賞、日本建築学会作品選奨など

昨年度に引き続き、第2回AND選考査員を仰せつかりました。今年度も昨年度同様力作揃いで選考は難航を極めました。ANDという概念は「単に出来上がったものでなく、そこに至る思考のプロセス」ですから、単に作品の出来栄えだけでなく、そこに込められた想い、閃き、アイデア、そして実現のための試行錯誤のプロセス、を重視して応募作品を拝見しました。ANDの捉え方は人それぞれですが、私自身は、“正直”、“感動”、“物語”、“社会”という事を大切にし、主にそういう視点で選考にあたりましたが、応募作品はそれぞれ違う視点でANDの理念を具現化したもので横並びの評価は難しく、まさにANDの多様性を感じました。

その中で今年度特に印象に残った作品に共通しているのは「さりげなさ」ということでした。シンプルのものを実現させるのは実は大変な苦労を伴います。ものすごく頑張っているけれどそれを決して表にあらわさず、さりげなく実現している作品に、上記の要素を強く感じて最終選考で投票しましたが、おそらく違う視点で選考したであろう他の選考委員も同じ作品に票を投じ、優秀賞以上はあっけなく決定しました。評価軸は違つても作者の“想い”が作品にじみ出ていたのだとしたら、これこそがANDの精神という事も言えるかもしれません。

“まれびとの家”は3D木材加工機と地元の木材を使い、伐採一加工一建設を地域完結させたもので、厚さ30mmの薄い木板材で構成された架構はパズル感覚で素人が手で組んでいくことができますが、そのディテールは大工棟梁との綿密な試行錯誤により生み出されています。肩に力入れず“さりげなく”素材に向き合うその姿勢はさわやかさを感じ、さらに、単に建築だけでなく、このプロジェクトは、異なる職域、異なる技術、異なる地域、伝統と未来を連関させるものとなっていることに大きな社会的な意義を感じました。

「建築が風景になりえるか」という建築家の想いでつくられた“KAIT広場”は、少し窪んだ地面の上懸垂屋根がかかるだけのシンプルな空間ですが、単純なものは実はとても難解で、その実現にはものすごいスタディとエンジニアリングが込められています。歪のない滑らかな形状を実現するため完全な引張場とせず圧縮を許したり、夏冬の温度差により変化する屋根形状と応力状態に対する設計など、緻密な分析が行われる一方で、数センチの誤差を許容した施工に対するおおらかさ、即ち、ち密さとおおらかさ、の両面があるからこそ実現できたのだと思います。この“さりげない”空間は今までにない空間体験を人々に与え、まさに技術そのものが芸術に昇華した作品です。

津波被災地の嵩上げされた堤防脇に建設された“閑上の掘建柱”は、海が見えるように高床としたピロティ建築をパイルベントという土木技術により架構したのですが、津波により流され、巨大な堤防と区画整理により過去と分断されるという、自然や人工物に翻弄された環境に抗うのではなく、それを受け入れつつ“さりげなく”過去と未来をつなごうという姿勢に設計者のこの場所に対する強い想いを感じました。また、この構法であれば将来再び地盤が沈下したり嵩上げされたとしても成立しているので、この場所が持つ過酷な状況を受け入れるおおらかさ感じます。

紙面の関係上3作品に触れましたが、最終選考に残った作品はいずれも、作品に込められた想い、閃き、アイデア、試行錯誤のプロセスに“物語”があり、社会、クライアント、協働者、素材、技術に対して“正直”であり、人に希望と“感動”を与え、“社会”に寄り添うものであったと思います。

選考を通じてこれらの作品とその想いに触れることができたのは大変幸せでした。

昨年も述べましたが、ANDという概念に明確な定義があるわけではなく、私たち建築に携わる者が「自分自身のAND」を持つことが大切で、この賞はそのきっかけとなるものだと思います。

AND 賞選考委員 堀越 英嗣



堀越 英嗣
HORIKOSHI Hidetsugu

1953年東京生まれ 1976年 東京藝術大学美術学部建築科卒業、1978年同大学院修了後、丹下健三・都市・建築設計研究所にて東京都庁舎競技設計最優秀案、パリ、イタリア広場、SINGAPORE, MARINA SOUTH、旧赤坂プリンスホテル、横浜美術館等担当 1986年アーキテクトファイブ共同主宰、モエレ沼公園（イサム・ノグチと共同）、とつり花回廊、新潟駅舎駅前広場等、2005年堀越英嗣 ARCHITECT 5 設立、五島美術館改修、正願寺等、日本建築学会賞（業績）、同作品選奨、グッドデザイン大賞、BCS 賞等共同受賞、2001年鳥取環境大学教授、2004年芝浦工業大学教授、2017年建築学部長、芝浦工業大学名誉教授

世界は今、新型コロナウイルスが蔓延し、否が応でも世界はグローバルな環境であることを改めて再認識させられています。それは閉じた社会での特殊性に閉じこもって現状維持ができないことを意味しています。今、まさに未来の建築のあるべき姿を人類の英知を結集して考える時であり、建築の世界も環境全体を科学的知見と哲学を持って持続可能な建築のあり方を建築家とエンジニアの様々な叡智をインテグレートし、未来に向けたビジョンを発信する時と考えます。これはこれまでの成熟した美学やオリジナリティの価値観では気づかない大切な視点を評価することが AND 賞の意義と考え、これをもとに本選考をおこないました。

今回も、第一回に引き続き、多様な分野と視点をもった高いレベルの応募作品が多かつたことに感銘を受けました。一次選考ではこの中から 10 作品が 2 次選考に進みましたが、昨年と同様に大変難しい選考となりました。

最終選考に残った作品については他の選考委員が受賞理由を詳細に説明されるので、AND 賞の持つ意義と作品の関係から考察します。

個人的には最優秀賞となった「まれびとの家」と「KAIT 広場」は視点によっては甲乙つけがたく、どちらも最優秀賞にふさわしい提案であり、最後まで逡巡しました。「まれびとの家」は、伝統技術や最新の技術によってまた、CO₂ 削減という環境的な優位性から急速に進歩している木質系の分野の提案である。その中で身近なファブラボという誰でもどこでも使える技術で、「使い手と作り手」の垣根を超えて世界中のどの場所でもその場所性を生かした空間を特別に修練した技術もなしに実現できる普遍性を示したこと、山本学治が凧の糸で示した、エンジニアリングと空間デザインが場所と時代につながった緊張関係を実現していると言えよう。甲陽園の家、RYUBOKU HUT もこの視点での優れた例です。

対して KAIT 広場は、これまで見たこともない空間と経験を提案するという王道の建築家の歴史的役割を、極めて高度な構造家の解析技術で実現した、素晴らしい「作品」である。そのプロセスから見ても AND 賞の最優秀賞に相応しい計画である。個人的には技術と成熟したデザインが極めて高いレベルで共同し、実現した追求の意義は「建築」が歴史的に持つ普遍的喜びであり、GALLERY U/a もこの視点での優れた作品である。今回は貧困、災害などの世界の問題に対して、専門家でなくとも、場所に根ざした解決を「使い手」である普通の人々が参加できる未来のヴィジョンを示している「まれびとの家」は AND 賞の意義を示す優れた提案であることから最優秀賞に選定させていただきました。

残念ながら最終選考に進めなかった作品で、特に気になったものについて以下に示します。

FUJIHIMURO “氷穴”：氷室の改修案で FRP の自立構造体の提案。FRP という可塑性と半透明性という素材の性質をいかして懸垂線の組み合わせの幻想的な空間を作り出している。FRP と空間造形が不可分の関係で美しい空間を実現しているが、残念なのは形態イメージが先行しその後に構造家と素材が決定したのではなく、当初から共同で形態を見出すプロセスであればより AND 賞に相応しかったと思う。

南麻布の幕屋：都市の硬質な建築群がもたらすファサードは街を歩く人々にとって均質で退屈な環境になりがちである。建築と街の接点であるエントランスに、エンジニアとの共同により生まれた暖簾のような柔らかい桧のスクリーンが内外に気持ちの良い環境を作り出す試みである。

Digital Garage “Pangaea” Super Furniture：個人の感性による彫刻という閉じた世界である木質素材による造形を 3D デジタル技術を使って構造的限界を含めて全員が共有し、様々な普遍性を生み出す可能性を示した提案である。

最優秀賞

まれびとの家

伝統 X デジタルファブリケーションに
構造的な価値付けをする

応募代表者：金田 泰裕 (yasuhirokaneda STRUCTURE) 共同応募者：秋吉 浩気 (VUILD 株式会社)

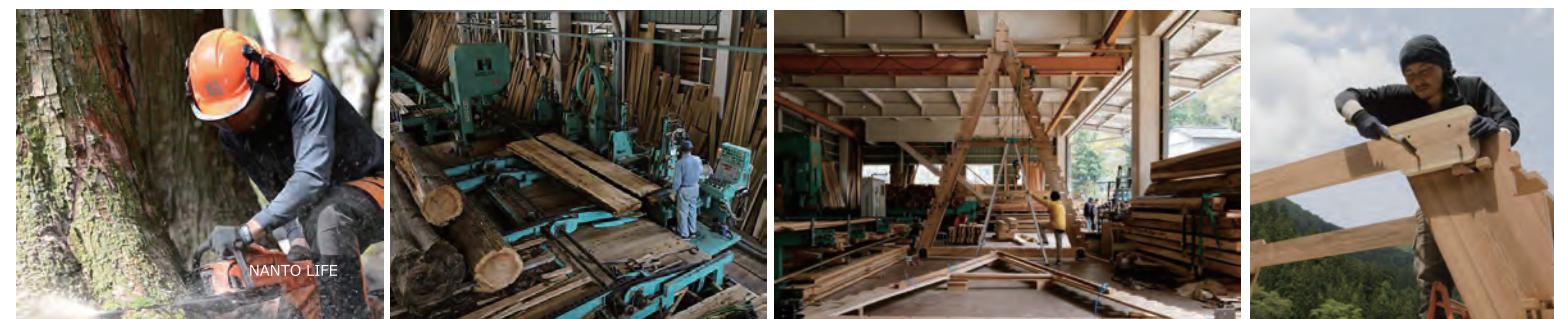


【応募理由】「まれびとの家」は、既存の職能・領域を超えた議論と試行錯誤の上できあがった建築である。3D木材加工機「ShopBot」と地元の木材を使い、製作を地域完結させることで、これまで避けられなかつた長距離輸送や環境負荷、時間、コストを削減することができており、現地の素材生産者が木材をデジタル加工することで、既存のバリューチェーンを介さずに、直接エンドユーザーに製品を届けられる仕組みのためのプロトタイプといえる。また、「伝統×デジファブ」というテーマを掲げ、「合掌造り」と「ワクノウチ」を参照し、「Aフレームトラス」と「貫による半剛接構造」という2つのシステムをクリアランス0.25mmの嵌合で実現している。(金田泰裕)



【講評】過疎化が進む山村に、交流拠点となるシェア別荘を、地元の民間人が発注者となって建設したものである。設計者たちはこの建物の構造を考えるにあたって、伝統的な構法である合掌造りを参考した。そして、構成する木の部材をすべて小型のCNCルーターで切り出すことで製作する方法を選択した。木材は敷地に近い山から切り出したもので、加工も設計者から受け取ったデータを用いて地元の企業が行う。架構の形式と仕口の工夫によって、施工には重機が不要で、誰もが参加できるようになっている。身近な人的ネットワークで、建設が完結できているのである。完成した建物は、セルフビルド的な粗さが見られず、しっかりととした精度を実現している。外観も、深い山の中に凛として建っており頗もししい。出版界では、1980年代にパーソナル・コンピューターのMacintoshが登場して、以降、執筆、編集、印刷までを個人の手で行うデスクトップ・パブリッシングが本格化していった。あのような革命が、建築界にも起こるのかもしれない。そんなことも想像した。建築を生み出す新たなプロセスを開拓したプロジェクトであり、AND賞の趣旨にもふさわしい作品である。(磯)

写真提供：Hayato Kurobe



優秀賞

甲陽園の家 LVL を用いた組木アーチフレーム

応募代表者：畠 友洋（畠友洋建築設計事務所） 共同応募者：萬田 隆（tmsd 萬田隆構造設計事務所）

【応募理由】建材の運搬もままならない場所において、1つのアーチを6枚の30mm厚のLVL材によるパーティで組み立てることで、容易に手で運び、組み立てができる仕組みを備えた建築を考案。材料はレーザーでLVL板から切り出し、二枚を重ね、それぞれつなぐ位置が重ならないようにずらして連結することで小さなLVLユニットの組み合わせによるゆったりとしたアーチ構造を実現。こうしてできた木のアーチを、互いに背中合わせに持たせあい、十字形状をした柱型に組み合わせることで、伸びやかに反復する架構の仕組みへと展開させた。このような建築と技術を融合させる、固有の技術的テーマを持ったデザインプロセスを共有することがAND賞の理念にかなうと考えたため応募いたしました。（畠友洋、萬田隆）



【講評】この計画は一見すると、円形ヴォールトという既視感のある建築であり、建築家の造形の好みにのように見えるかもしれない。しかしこの計画のプロセスを読み解くと、様々な制約によって、再建が難しい密集地の建築の再建を可能にする繊細な技術に裏付けられた建築スキームが見える。敷地は斜面地の密集した街並みで、狭小な道のため重機の工事が難しい環境である。このような斜面の環境は日本中どこでも見いだされ、老朽化した住宅の再建は厳しい普遍的問題である。今回の提案はこの普遍的で困難な状況でも豊かな空間の新築を可能にする提案である。具体的には正方形グリッドに45度に渡しきかけられたアーチ状の構造体に特徴がある。一階部分の柱から2階の高さまで一体的に切り出された半円形のアーチ構造が基本単位となっている。この基本単位は小型トラックや人が運べる重量とサイズのため重機や大きな足場も必要なく、2階分の階高の主構造が4本の組柱とアーチとして組み上がる。繊細なサイズの柱とアーチの組み合わせが作り出すヴォールトが開放的な内部空間を作り出している。ルネッサンスのブルネレスキの捨子保育園の繊細な石のアーチを鉄のタイバーで実現した、建築と技術の美しき融合がもたらした建築の可能性と同様の清々しさを感じる計画である。（堀越）



優秀賞

懸垂鋼板が空に漂う KAIT 広場

応募代表者：佐藤 淳（佐藤淳構造設計事務所、東京大学）

共同応募者：石上 純也（石上純也建築設計事務所）、小西 泰孝（小西泰孝建築構造設計、武蔵野美術大学）

【応募理由】湾曲した極薄の屋根を湾曲した地面間に漂わせると、離れた位置が見えなくなつて、緩やかに「分節」されたいつつある居場所が現れる、そんな「風景」のような空間イメージを実現させる構造デザインとして「ツーウェイ」に垂れる鋼板懸垂構造が生まれました。ランドスケープのような緩やかな曲率では強烈な引張を生じ、それにも関わらず孔だらけで、ゆがんだ四辺形にツーウェイに垂れるときに少し圧縮を許す、そんな懸垂構造は簡素なようで意外なほど難問でした。形状と力学の関係をディスカッションし尽くし、基本計画から実施設計へと構造デザインを継承しながらこれらの課題を解き、職人技を発揮してもらひながらも少し肩の力を抜くことを職人たちと話職人たちと話しました。ツーウェイの懸垂構造を実現するときにどのように解けばよいか示せたと感じ、これこそ Archi-Neering と感じました。（佐藤 淳）



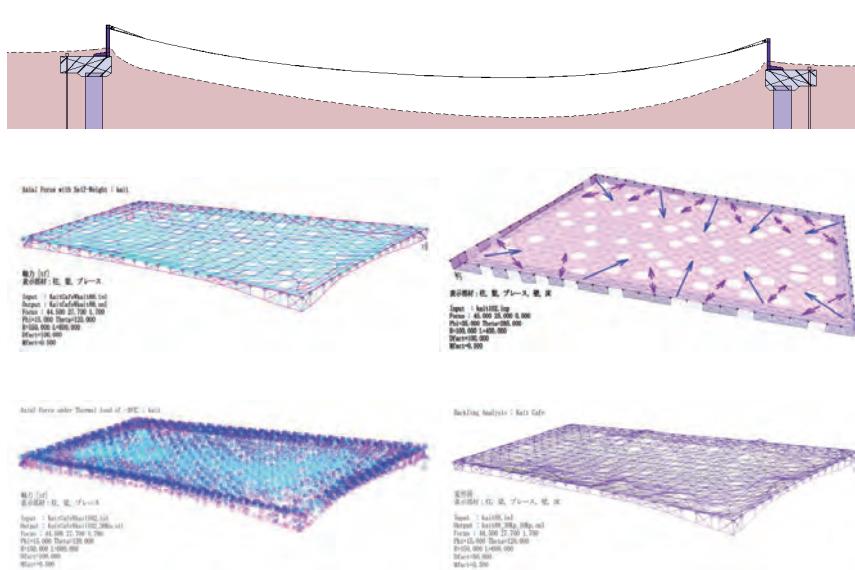
【講評】「建築が風景になりえるか」という建築家の想いでつくられた建築は、少し窪んだ地面の上に4000m²の懸垂屋根がかかるだけのシンプルな空間である。ゆるやかに垂れ下がった屋根は厚さ12mmの鋼板一枚で出来ている。薄い板が垂れ下がっただけの一見単純な構造であるが、単純なものほど難しい。そこにはものすごいスタディとエンジニアリングが込められている。

四角の平面に2方向懸垂した曲面を当てはめると角の部分でひずみが生じる。完全な引張場とせず圧縮を許すことで滑らかな屋根形状が実現できている。水平反力を処理するための基礎やアースアンカー、夏冬の温度差により変化する屋根形状と応力状態に対する設計など、緻密な分析が行われる一方で、数センチの施工誤差を許容したり

溶接ビードをそのまま残すなど、施工に対するおおらかさ、即ち、ち密さとおおらかさ、の両面を有することがこの建築を実現に結び付けたのだろう。

「建築の内部に新しい外部空間、新しいランドスケープをつくりたかった」と建築家がいうように、この空間は今までにない空間体験を人々に与えるに違いない。

「エンジニアリングそのものが芸術になると思っている。芸術というのを見た人の感動によるわけで、技術にはそれがある」という内田祥哉先生の言葉通り、技術そのものが芸術に昇華した作品である。（陶器）



優秀賞

閑上の掘立柱

震災後に嵩上げされた堤防と共に存するオフィス

応募代表者：小俣 裕亮 (new building office)

共同応募者：三崎 洋輔 (EQSD 一級建築士事務所)

【応募理由】2020 年に AND 賞が始まり、前職で設計を担当していた ARK NOVA を提出し、最優秀賞を受賞しました。その審査の過程では、単なる構造設計の新規性のみならず、批評性や技術の発展性、完成に至るまでの意匠、構造をはじめとする各分野の協働のプロセスやストーリー性といったことが議論されており、独立後に設計した建築についても機会があれば同賞に応募したいと考えていました。応募作品は震災後に一変した環境の中にどのように新たに人の居場所を作ることができるか、ということから出発したプロジェクトですが、敷地がもつ場所性や問題、今後のあり方に応じる構造について、設計を通じて考えたことを問い合わせてみたいと思いました。（小俣裕亮）



【講評】強い建築である。敷地は東日本大震災の被災地の海と川に挟まれた軟弱地盤にある。海側に防潮堤、川側の堤防に囲まれ、地上面からは何も見ることができないにもかかわらず、オフィスを建てるようになった。失われた眺望を取り戻すため、橋梁のパイルベントという工法を用いて、杭を地中の支持地盤に打ち込みながら空中まで立ち上げている。現代の掘立柱のように、防潮堤の上に建築を持ち上げようとする野心的な建築だ。

土木分野の杭を建築分野の柱とするこのような工法では、異なる分野の境界点が重要となる。ここでは、引張プレートを用いて柱と梁を剛接合とし、柱頭のプレートの孔開け位置で精度を調整している。この衝突ともいえる土木と建築の関係は、インテリアや家具のデザインにまで及んでいる。この衝突は、素材や寸法への気づかいによって、不思議な優雅さを獲得しているように見える。

建築家の設計も構造家の技術も、機能と合理に基づいてストレートである。しかし、その立ち姿はなぜか異形で、日本という過酷な自然環境に住み続ける困難を写す鏡のように、私たちの心に問いかけてくる。このような作品を AND 賞に選んだことを、とてもうれしく思う。（福島）

入賞

GALLERY U/a



構成ダイアグラム



ROOF :
steel slab t=6
urethan coating
max slope 1/150



SHELL :
curved tapered steel beam
catenary plate 19 x 100 - 350



V COLUMNS :
top section 95 x 95 x 19
bottom section 55 x 55 x 19



BASE :
reinforced concrete slab

繁田 諭



応募代表者：岡田 哲史（岡田哲史建築設計事務所）

共同応募者：北條 稔郎（北條建築構造研究所）

高橋 和志（高橋工業）

【講評】車好きのオーナーが所有する自動車を見て触って楽しむことを目的に作られたギャラリーで、太平洋を一望する週末住宅の脇に建つ。車を引き立たせるため出来る限り透明な建築が求められた。

建物は1辺 13.5m、高さ 3.5m の矩形の“ガラスの箱”である。躯体が目立たなくなるように、外周各辺 2 列 V 字型柱および屋根にダイアゴナル状に配置した梁で建物を構成している。柱、梁とも平鋼で構成し、V 字型柱は床に向かって断面を絞り、ダイアゴナル梁は端部に向かって断面を絞ることで軽やかなものとなっている。

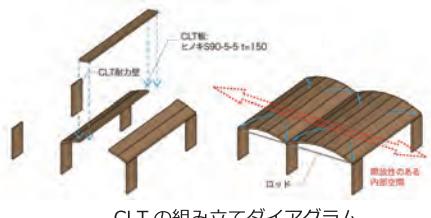
エッジの利いたシャープな建築を際立させてているのは、作者が言うように「屋根鋼板を梁上端より 60 mm 浮かせて連結している」ことである。小さな束により屋根を支持することで、屋根が浮いているような軽やかな印象を与えるだけではなく、屋根一梁の溶接ひずみによる歪み、および屋根の水勾配とあらわし梁の見えがかりの問題を一気に解決している。一見小さな工夫に見えるが、それは長年の経験と技術を有する設計者、施工者のコラボレーションにより導き出されたものである。（陶器）

入賞

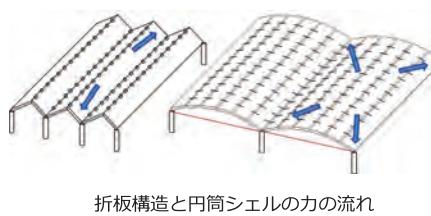
山並みに呼応する CLT の連続円筒シェル屋根 南予森林組合新事務所

応募代表者：金箱 温春（金箱構造設計事務所）

共同応募者：末光 弘和（SUEP）、柳原 直和（イシモト（元・新企画設計））



【講評】愛媛県産木材の利用を促進するための、CLT の新しい使い方の可能性を目指した木造の事務所である。敷地周辺の山並みに呼応するような、大小に連続する円筒シェルの屋根が特徴である。こう書くと当たり前のようにだが、実際にはチャレンジ精神のある建築家と経験豊富な構造家の協働によって多くの課題を解決しないと、このようなデザインは実現することができない。特に、円筒シェルという曲面を CLT という平面で作るために、細長い平板の長手方向を接合する必要があり、そこには面内と面外という 2 つの力が生じる。面内力には既製のビスなどで適切に対応しながら、面外力には検討を重ねてラグスクリューと箱型金物を用いた新しい接合金物をこのプロジェクト用に開発している。工事が終わってしまうと、この接合金物はほとんど見えなくなる。このような困難にもかかわらず、この作品は「当たり前」のように建っている。（福島）



入賞

D タワー西新宿

応募代表者：淺見 泰則（株式会社 日本設計）

共同応募者：牧野 令（株式会社 日本設計）

中藤 泰昭、内藤 健吾、小林 治男、櫻井 佑美、加納 和麻（大成建設一級建築士事務所）



写真提供：川澄・小林研工写真事務所

【講評】東京・西新宿に建つ、オフィスと集合住宅の複合用途をもった超高層ビルである。住宅フロアになっている高層部はセンターコア、オフィスフロアになっている低中層部は偏心コアを採用し、その間の 19 階を構造設備切り替えフロアとしている。異なる構造形式を上下に重ねることが可能になったのは、外殻チューブ構造の採用による。外観にも現れたプレキャストコンクリートを基調とした柱は、オフィ



ス部から住宅部へ切り替わるところで枝分かれし、内部の空間構成に対応して細くなる。また地面のレベルでは柱が集約されて、外から人を招き入れやすいようにしている。不均等に斜めに伸びた構造は、前面のケヤキ並木とも呼応して、都市景観の形成にも寄与している。異なる機能を合理的に接続し、その表現が外観にも表現されたこのビルは、超高層建築の自由なデザインを切り拓いていくものとして評価できるものである。（磯）

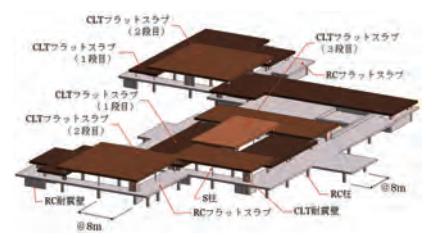
入賞

CLT 二方向フラットスラブ 木の美しさを活かした環境型ターミナルの設計を通して

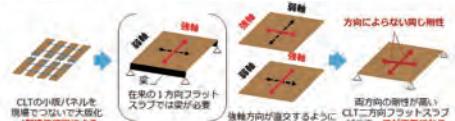
応募代表者：三松 あずさ（株式会社 日建設計） 共同応募者：村上 勝英（株式会社 日建設計）



エスエス 提供



出発ラウンジ棟の構造概念パース



CLT 二方向フラットスラブの概要

【講評】沖縄県宮古島市に建設された、みやこ下地島空港のターミナルビルである。空港ターミナルに必要とされる大空間を実現するため、分厚いスラブによる屋根架構を採った。そしてこのスラブを、CLT（Cross Laminated Timber）の小版パネルを現場でつないでつくっている。そして、方向性のある CLT 材を直交させて重ね合わせることで、梁がなく柱だけで支えられたシンプルな木の水平天井を実現した。複数のスラブが隙間を開けて積層されることにより、水平方向の開放感が高まり、周囲の緑も目に飛び込んでくる。リゾートを楽しみにやってきた来訪者にもうれしい空間演出だろう。戦後の沖縄では鉄筋コンクリート造で多くの建築が建てられてきた。コンクリートの屋根が強い日差しを遮り、その下にできる日陰が快適な環境を生む、そんな沖縄らしい建築が、材料を木に置き換えて生み出されていく。沖縄の新しい建築のあり方を示唆した建築である。（磯）

入賞

HIROPPA ありきたりな材料とローテクでつくられた上品な建築

応募代表者：金田 泰裕 (yasuhirokaneda STRUCTURE)

共同応募者：元木 大輔、村井 陸 (DDAA)、土井 伸朗 (SOUP DESIGN)、木村 友美 (yasuhirokaneda STRUCTURE)



KENTA HASEGAWA



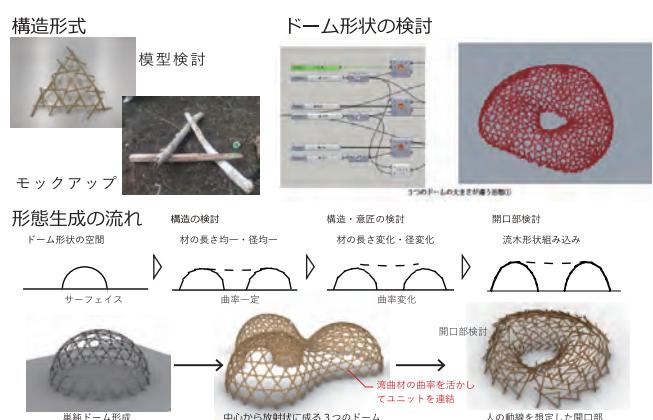
【講評】陶磁器を企画製造する企業の、陶磁器やアート作品のショップ、カフェ、公衆トイレ等で構成された施設である。4000 m²ほどの敷地に配された木造平屋の建物は「ありきたりな材料とローテク」で特別な技能を持たなくとも構築できるように工夫されている。柱は45×105ダブル、直行する梁はそれぞれ45×300ダブル、45×270シングルと、材幅は45mmに統一され、必要長さにカットした部材同士をボルト留めしてゆくだけのシンプルな架構であり、素人でも施工が可能な単純なシステムとなっている。「派手さやアクロバティックさとは別のところにあり、かといってミニマルを目指すわけではない絶妙な解答を目指した」と作者が言う通り、即物的ではあるが洗練的な美しさのある空間が出来上がっている。伝統的な技能や特殊な技術を必要とするものではなく、プレカットのような規格にとらわれることのない構築法はこれから木造構法のありかたの一つを示している。肩に力をいれることなく“さりげなく”新しいことにチャレンジしようとする、作者の人柄を感じさせる作品である。(陶器)

入賞

RYUBOKU HUT 流木を構造体とした縄文建築

応募代表者：芦澤 龍一 (滋賀県立大学)

共同応募者：幸永幹真、黒木一輝 (滋賀県立大学大学院 環境科学研究科)



【講評】現代のコンピューターによる構造はこれまで見たこともない形態を実現している。特にシステムチックな構造体においてより複雑な形態、構成が部材単位から全体まで力の流れを解析し実現不可能のものが無い様な時代となっている。これまでの様な単純なシステムがもたらす明快な構造の美学では飽き足らない、ゆらぎや変形も取り入れることが可能であることから、敢えて建築家が自然に似せた複雑系の形態を作り出す傾向が出てきているが、制約という糸を切って自由に羽ばたくが、あえなく墜落してしまう廐の様である。

この計画は、自然の木々がその成長過程で太陽と風を求めて必死で変形した枝の形態を敢えて利用することで、自然の木々や林と共に鳴る複雑系の構成のシェルターを作り出している。変形した枝を単位としたレシプリカル構造で構成することで、あたかも縄文時代に身近な素材で自然と共に鳴る合理的な竪穴式住居を作り出した知恵を現代で実現する優れたチャレンジである。(堀越)

入選

ロッドネットで織物表現 桐生ガススポーツセンター (桐生市民体育館)

応募代表者：渡邊 朋宏（株式会社佐藤総合計画）



FUJIHIMURO "氷穴"

応募代表者：長坂 健太郎（株式会社長坂設計工舎）

共同応募者：坂牛 卓、甲津 多（O.F.D.A.associates）



Digital Garage "Pangaea" | Super Furniture

応募代表者：丸林 哲（竹中工務店）

後藤 一真（Arup）

共同応募者：宮本 純子（竹中工務店）

天野 裕、鹿嶋 渉（Arup）

Robert Greenwood

Daniel Berlin（Snøhetta）



©Nacasa & Partners

SQUWAVE 木質パビリオンから始まる人と空間の相互作用

応募代表者：大原 由己（東京都市大学建築都市デザイン学部建築学科 4 学年落合研究室）

共同応募者：橋本 和樹、落合 陽（東京都市大学）



第2回 AND 賞募集要項

AND 賞の目指すもの

AND 賞が目指すものは、完成された建築作品としての評価だけではなく、そのプロジェクトがもつ固有の技術的テーマ（構造や環境など）を明らかにし、デザインプロセス、しくみ（システム）やしあげ（ディテール）、素材や施工法などを真摯にイノベーティブに追求する人やチームを表彰することである。

「AND」とは、AND 展で見えてきたもの

アーキニアリングデザイン（AND）とは、「建築と技術の融合・触発・統合の有様とそれを志向する理念」のことである。

2008 年より 12 年以上にわたって国内外で開催されてきた AND 展では、時に 150 点余の模型・パネルが並び、数多くのフォーラムが開催された。

そこから見えてきたものは二つ。

第一に、「建築は織物だ」ということ。連綿と引き継がれる「技術」のタテ糸は強靭であり、感性や社会的欲求を映す「芸術」のヨコ糸により、時代の模様が描かれている。その交点には常に両者の葛藤や協同の物語がある。

第二に、「技術は空間を介して建築とつながっている」ということ。意匠が失われても空間はあるが、構造なくして空間は成立しない。イメージとテクノロジーの有機的な融合・協同の結果として、「美しく合理的な」「合理的で美しい」建築の空間形態が生まれている。そのことは歴史的にも検証されていよう。

AND 賞で評価したいと考える視点

今の時代の頂点としての「点」の建築の評価は既に多くの建築賞で選定されている。

AND 賞は時代が求める建築を、作品という「点」として捉えるのではなく、美しい歴史的建築を実現に導いた一連の芸術と技術の融合というプロセスから学び、未来へ繋げていくという「線」や「面」のような普遍的・横断的視点をもって追求する一貫した姿勢と業績を評価したい。

- ▷ 発想から実現に至る技術的テーマ性のあるデザイン・プロセス
- ▷ 個性的作品性だけではない普遍的技術の創造
- ▷ システム・素材・ディテール・工法などの新しい発想・工夫新築、恒久的な建築作品だけでなく、再生や仮設、橋など建築以外の構造物、階段などの部位や家具・オブジェなどスケールの小さな作品も本賞の対象としたい。

応募作品の対象

2016 年 1 月 1 日より 2021 年 9 月末日までに完成した国内作品、あるいは国内在住の設計者等による海外作品とする。

応募資格

・個人（複数名も可）による応募とし、重賞も可とする。複数名で応募の場合は、それぞれの応募者が応募業績にどう関与したかを応募シートに明記する。

・一次選考を通過した場合、最終選考会（2022 年 2 月 5 日（土））に参加し、プレゼンテーションを行う。

提出物

①応募シート（A4 1 枚）

※フォーマットは HP よりダウンロードしてください。

※応募作品の完成年月を明記してください。

②プレゼンテーションシート（A3 1 枚） ※形式自由

※①のエクセルデータおよび②の PDF データ（20MB 以内）を提出先まで E-mail にて送付してください。

※データ受領後、数日以内に「受領確認メール」を事務局より送付致します。本メールを必ず確認してください。受領確認メールが届かない場合は事務局までご連絡をお願いします。

表彰件数

最優秀賞 1 件、優秀賞 3 件程度を表彰する。

入賞者には賞状及び記念品を授与する。

選考方法

一次選考：書類審査により 10 作品程度を選定する。

最終選考：一次選考通過者は 2022 年 2 月 5 日（土）開催の最終選考会でプレゼンテーション（プレゼン時間 10 分程度 + 質疑応答）を行い、公開審査（一部非公開）により最優秀賞、優秀賞を決定する。

応募締め切り及び提出先

2021 年 12 月 10 日（金） 23:00 まで

提出先 : a-forum@a-forum.info 担当 : 麓絵理子（AND 賞事務局）

日程

2021 年 10 月 10 日（日） 募集開始

2021 年 12 月 10 日（金） 応募締め切り

2021 年 12 月 18 日（土） 一次選考会（非公開）

2021 年 12 月 24 日（金） 一次選考通過者発表（HP 上にて公開）

2022 年 02 月 05 日（土） 最終選考会会場（予定）：建築会館ホール

2022 年 02 月末（予定） 表彰式及び受賞講演会

著作権

表彰作品の応募資料として提出された写真・図版等について、AND 賞実行委員会は編集出版権を持ちます。また、複写権は本会に委託するものとし、本会が表彰作品の関係資料を展示、記念冊子の印刷、ホームページ等に掲載する場合、無償で使用できるものとします。

応募資料に使用する写真・図版の著作権所有者が応募者以外の場合は、あらかじめ当該著作権所有者の許諾を得た上で使用してください。

・最終選考会参加作品は A-Forum ホームページ上にて公開予定

・記念冊子を制作予定

※第 1 回 AND 賞入賞作品と講評は、HP 上にて公開中です。

選考委員

福島加津也（委員長） 東京都市大学教授／建築家

陶器 浩一 滋賀県立大学教授／構造家

磯 達雄 建築ジャーナリスト

堀越 英嗣 芝浦工業大学名誉教授／建築家

問い合わせ先 : AND 賞事務局 (a-forum@a-forum.info)

主催 : A-Forum (代表 : 斎藤公男)、AND 賞実行委員会

第3回 AND 賞 2022（予定）

募集要項は第 2 回に準ずる。

但し応募作品の対象は 2017 年 1 月 1 日より 2022 年 9 月末までに完成した作品とする。

【日程】

募集要項発表 2022 年 9 月初旬

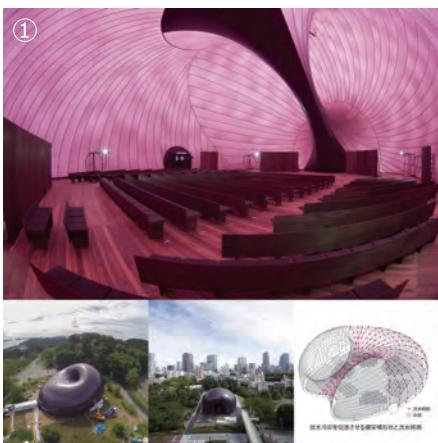
応募締切 2022 年 12 月初旬

一次選考 2022 年 12 月中旬

最終選考 2023 年 1 月末

表彰・講演 2023 年 2 月末

第1回 アーキニアリング・デザイン・アワード 2020



最優秀賞

- ① LUCERNE FESTIVAL ARK NOVA

東日本大震災の被災地を巡回する移動式仮設空気膜構造

優秀賞

- ② スケールの異なる複層空間とハイブリッドな屋根構造

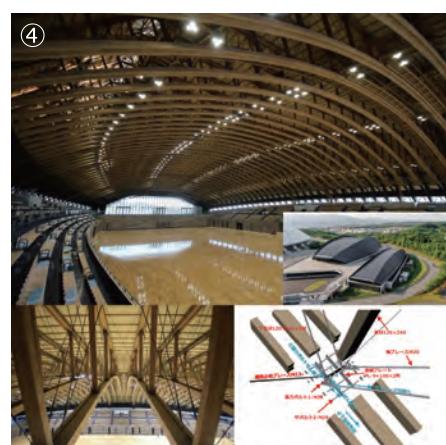
〈福井県年縞博物館〉

- ③ TBM PROJECT - CLT を用いた折板構造 V 字梁 -

- ④ 細く短い木材を シンプルにつないでスパン 70mを実現する大空間屋根構造

昭和電工 (大分県立) 武道スポーツセンターの屋根構造における

「構造形態」 - 「部材構成」 - 「接合ディテール」 のトータルデザイン



入賞

- ⑤ 文化財の復旧過程を見せるための構造手法 - 熊本城特別見学通路 -

- ⑥ CRANKS

- ⑦ 木頭の家

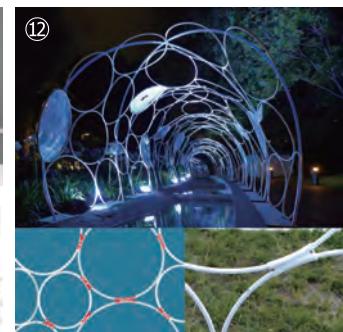
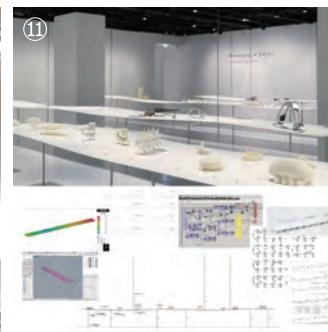
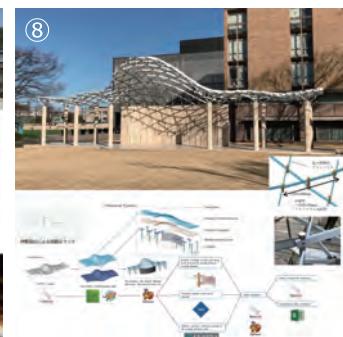
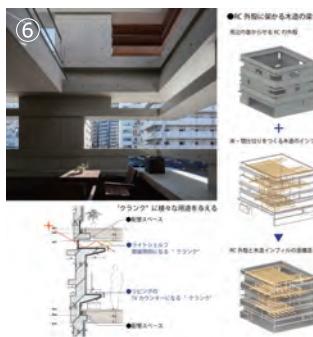
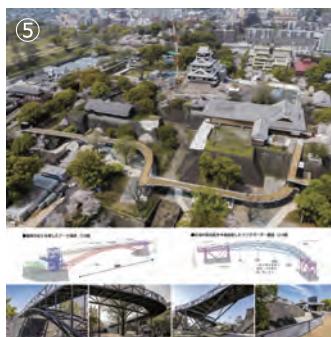
- ⑧ 洗足学園 STAGE ON THE LAWN

- ⑨ 垂井町役場

- ⑩ CLT と鉄骨によるフィーレンディール構造 鳥取ユニバーサルスポーツセンター「ノバリア」

- ⑪ 自然の力によって波打つ天板

- ⑫ White Tube サークルパッキングのアルゴリズムを利用したトンネル空間で、来場者に憩いの場を提供 -





第2回 アーキニアリング・デザイン・アワード 2021

実行委員長 斎藤 公男
選考委員長 福島 加津也
選考委員 磯 達也・陶器 浩一・堀越 英嗣
実行委員会 小澤 雄樹・宮里 直也・内海 彩・大野 博史・小西 泰孝・多田 僕二・山田 憲明
運営委員長 三輪 富成
運営委員会 和田 章・神田 順・金田 勝徳・松永 直美・春藤 元宏・麓 絵理子 (順不同)

事務局 A-Forum
101-0062 東京都千代田区神田駿河台 1-5-5 レモンパート II ビル 5 階
TEL : 03-5281-7880 FAX : 03-5281-7881 www.a-forum.info

印刷所 株式会社 グラフィック



ジャンボ鯉のぼり (1988-、川口衛)

科学（力学）と工学を駆使して生まれた芸術と技術の、美しくダイナミックな姿形。



AND の理念であるアーキテクチャーとエンジニアリングが融合・触発・統合される有様（テーマとプロセス）を注視したい。
最終形がまだ見えない曖昧なイメージから出発し、アイデアと技術がカタチとなるデザイン・プロセスに本当の輝きがある。
作品主義的価値観から脱却し、普遍的創造性に光を当て、その思考の結果としてのデザインやプロジェクト（作品）を表彰する。